

先月、渡来人をテーマに秋季講演会を開催しました。広辞苑では、「古代、朝鮮半島諸国や中国などから渡来し、日本列島に定住した人々とその後裔」と渡来人を定義していますが、古くは、朝鮮半島からの渡来人は古渡才伎と呼ばれていました。しかし、その後、5世紀後半以降の渡来人は今来才伎と区別されるようになります。5世紀以降、渡来人が歴史的に重要な役割を果たすようになったと考えられています。才伎とは優れた技術を持つ人を意味していて、今来才伎は、須恵器生産を担った陶部や馬匹文化に必須な鞍部など、部民制下で職能集団を形成し、ヤマト王権の発展とその後の律令国家の形成に不可欠な存在であったと考えられます。

昨今の日本は、グローバル化が後退する兆しがありますが、およそ千五、六百年前、百済、倭国間の国家レベルの移民政策が繰り返されたことによって渡来してきた今来才伎などの渡来人は一説では130～140万人、古墳時代末の全人口の四分の1を占めるまでになったとされます。

優れた技能とマンパワーを兼備した今来才伎は、混とんとした東アジア情勢下で、国家存亡の危機を乗り越えるのに大きな役割を果たしたことでしょう。移民政策の成功例ではないでしょうか。

発掘調査だより

岡遺跡第8次調査

8月より実施していました岡遺跡第8次調査は10月22日に終了しました。

今回の調査では、竪穴建物6棟（SH-1～6）や掘立柱建物1棟（SB-1）、溝3条（SD-1～3）の他、土坑、ピットを検出しました。

まず、竪穴建物6棟のうち、切り合い関係を持つSH-2、4のうちのSH-2は一边4.3m程を測る方形プランの建物で、東辺中位にカマドを具え、東南コーナーに貯蔵穴を配置しています。床面から出土する土器器甕や須恵器坏蓋から6世紀台の時期が考えられます。同じく切り合い関係をもつSH-6を切り込むSH-5もSH-2同様に古墳時代後期の時期が想定できます。

調査地中央で検出したSH-3は全容を呈していて、一边6.3mの方形の竪穴建物で、床面から貯蔵穴、支柱穴、炉跡を検出しました。カマドを設けていない点などからSH-2より時期



岡遺跡第8次調査位置図



発掘調査全景写真

の遡る建物と考えられます。なお、支柱穴からは滑石製管玉が出土しています。

また、SH-2に切り込まれるSH-4は、著しい削平を受けてはいるものの、周壁溝が残存していたことから竪穴建物であると判明しました。SH-5に切り込まれるSH-6とともに継起的な時期関係にあるものと考えられます。

掘立柱建物SB-1はSH-3の直ぐ西側で検出し、2間×1間の規模を測ります。建物柱穴からは須恵器の小片が出土してい

上：空中写真 下：発掘構面平面図



企画展示「阿比留遺跡からみつかった木製樹物と埴輪」の開催について

本紙乙貞でも度々お伝えしてきた阿比留遺跡出土の木製樹物と形象埴輪を企画展「阿比留遺跡からみつかった木製樹物と埴輪」というテーマで11月1日（土）から30日（日）までの期間で開催しました。期間中は、関心のある多くの皆さんが来館されました。

さて、木製樹物とは、埴輪とともに古墳の墳丘に立ち並べられた器物で、古墳時代の首長層が自らの権威を誇示するために所持していた儀仗や蓋、盾、矢を入れる鞆といった威儀具や武器などの器財を象ったもので、石見型木製品や笠形（蓋）、盾形、鞆形木製品などが知られています。

阿比留遺跡第6次調査で検出された古墳（2号墳）の周濠からは、石見型木製品5点や盾形木製品2点、笠形木製品1点が出土しました。

石見型木製品が出土する古墳（遺跡）としては、全国18例目、盾形木製品は4例目と大変稀有で、更に、近畿地方の奈良県と野洲川流域にその出土が偏っています。

時代を遡る3世紀半ば以降、ヤマト王権が列島内に版図を広げた地域には、巨大前方後円墳が築かれます。前方後円墳を頂点とし、規模や墳形が序列化される、いわゆる前方後円墳体制が布かれます。



見学風景（秋季講演会後）



古墳時代前期、琵琶湖の水運拠点であった下長遺跡で、首長居館とともに出土した団扇形木製品などの数々の威儀具は強いヤマト王権色を放っていますが、それは、揺籃期のヤマト王権が野洲川流域と誼を通じていたことを物語る資料と理解することができます。

木製樹物もまた、前方後円墳体制の枠組みとは異なった、王権との強い関りを表徴しているものと考えられます。



「阿比留遺跡からみつかった木製樹物と埴輪」展示風景

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』やFacebookからもご覧いただけます！



◀ 歴史のまち守山はコチラから
<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶
<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



埋蔵文化財センター友の会 第3回見学会を開催しました！

10月10日(金)、第3回見学会を開催しました。今回は、午前に関西大学博物館、午後は豊中市郷土資料館と尼崎市立田能資料館を見学させていただきました。

参加者はスタッフも含めて42名、秋晴れの下で大阪、兵庫の史跡と文化財の見学を堪能しました。

なお、今回の見学会では、関西大学博物館の今井、田邊、井藤さん、豊中市郷土資料館の橘田館長、田能資料館の酒井、中村、竹原さんには大変お世話になりました。乙貞紙面にはなりますが、厚く御礼申し上げます。



左：関西大学博物館



右：豊中市郷土資料館見学風景



左：田能資料館屋外での見学風景



右：昼食風景

秋季講演会 「湖南地域の古墳文化と渡来人たちの邂逅」 開催しました！

11月15日(土)開催の秋季講演会は、「上記のテーマで、滋賀県立大学人間文化学部准教授の金 宇大さんにご講演いただきました。

4世紀以降に朝鮮半島や中国大陆から渡来した人々は今来才伎と称され、内政的には、ヤマト王権の版図拡大やその後の律令国家成立に重要な役割を担っていました。



講演会風景



金宇大さん講演風景

講演では、古墳時代の金工品研究者の視座から、渡来人の痕跡が色濃い滋賀県、分けても湖南地域の渡来人が関与した手工業生産遺跡などを具に捉え、その特性や、ヤマト王権や大津市に残る百穴古墳群などの横穴式石室群との関係性に言及されるなど、約70名の受講者の耳目を集めるにあまりあるお話をさせていただきました。

金宇大さん、ありがとうございました！

【後記】前号発行以降、10月には、笠原南遺跡で現地説明会が、11月には、昨年阿比留遺跡で検出された稀有な木製樹物と形象埴輪の企画展示が開催され、発掘調査成果をご覧いただく機会がありました。現地説明会は、発掘調査を終えて埋め戻す運命にある遺構を見学しながら、調査成果の詳細や意義を知ることのできる啓発事業として、発掘調査実施当初から時代を超えて受け継がれています。

現地に立って、検出された遺構と直に向き合える唯一の時間という点で、茶道の精神文化を端的に表す一期一会を想起しました。この一期一会とは、ご存じのとおり、一生に一度きりの機会、出会いを大切に、真摯に向き合い誠意を尽くすことを意味しており、千利休が茶道の肝として語った「路地に入ルヨリ出ヅルマデ、一期二度ノ会ノヨウニ」を茶道に造詣の深い井伊直弼が江戸時代末期に広めたとされています。現在の行政による発掘調査は、開発によって地下遺構が破壊される前に記録保存するという調査が大半を占めます。

現地説明会の機会を大切にしてください。参加される皆さんはもとより、むしろ調査担当者こそが一期一会の精神をもって調査に携わらなければいけない。そんな風に思います。

(馬耳東風)